《公開講演会記録》

「元使塚」のはなし

都竹武年雄

今日は「元使」の塚、つまり「元」の国から来た使節の墓の話をさせていただきます。わが国では「元寇」として知られている蒙古軍の襲来は、一般には神風が吹いて、一夜にして蒙古の軍船は沈み、わが国は事なきを得たと理解されています。そこからあの太平洋戦争の際には、戦況がいよいよ不利になっても、わが国にはいつか神風が吹いて頽勢を挽回することができる、という一種の信仰のようなものが、国民の間にあったように思われます。

しかし、ことはそんなに簡単なものだったのでしょうか。「元寇」前後の状況とそこから「元使」の墓が神奈川県藤沢市の常立寺という寺に現存するにいたる経緯をご紹介しようと思います。

元寇というのは、まず西暦１２７４年の「文永の役」と同じく１２８１年の「弘安の役」の二度の戦いを指します。しかし、それに先立つ１２６３年、元の皇帝・フビライは高麗の国使を使って「牒状」を日本に届けさせたのを皮切りに、67年から文永の役の前年、１２７３年まで毎年のように、高麗国使を伴った元使を派遣しました。彼らは九州に着いても時には相手にされなかったり、時には持参した「国書」の写しが大宰府から鎌倉幕府に届けられたりしました。

これに対し鎌倉幕府は京都の朝廷には報告しましたが、直接、元に回答することは一切しませんでした。問題はその国書には一体なにが書いてあったかです。現在、「至元三年八月」（１２６６年）と年号が書かれた国書の写しが、２年後の文永５年に奈良の東大寺に届けられたものが残っています。残っているのはこれだけです。

内容を紹介しておきます。

「上天より命を脊けて、大モンゴル皇帝、日本国王に書を奉ず。朕惟うに、古より小国の君すら、境土相い接すれば、尚お講信修睦に務む。況んや我が祖宗は天の明命を受け、区夏（中国）を奄有す。遐方の異域の、威を畏れ徳に懐く者、悉く数うべからず。朕が即位の初、高麗の無辜の民の久しく鋒鏑（注：戦い）に瘁れしを以て、すなわち兵を罷めて其の旄倪（老人子供）を反らしめたり。高麗の君臣は感戴して来朝し、義は君臣なるも、歓は父子のごとし。計るに王の君臣もまたすでにこのことを知らん。高麗は朕の東藩なり。日本は高麗に密邇（注：近い）し、開国以来、亦た時に中国と通ぜり。しかるに朕が躬に至りては一乗の使も和好を通ずることなし。尚お恐るらくは王の国のこれを知ること未だ審かならざるを。故に特に使を遣わし、書を持ちて朕が志を布告せしむ。冀くは今後、問を通じ好を結び、以て相い親睦せん。また聖人は四海を家とす。相い通好せざるは、豈に一家の理ならんや。以て兵を用いるに至るは誰が好む所ぞや。王それこれを図れ。不宣。至

元三年八月　日」（勝藤猛著『フビライ汗』中公文庫より）

全体としていたって穏やかな口調です。それだけに最後の一節、「以て兵を用いるに至るは誰が好む所ぞや」の凄みが際立ちます。臣属しなければ、有無を言わさず攻めるぞ、というわけです。

しかし、鎌倉幕府は相手にしませんでしたから、文永の役となります。この年の10月5日から蒙漢連合軍2万5千と高麗軍8千が、対馬・壱岐を経て19日、博多湾に現れ、上陸して武士団との戦闘が始まりました。「やあやあ我こそは」の日本式戦闘方式と集団戦闘の蒙古軍、武器も違いますから、戦闘は不利でした。

ところが20日の夜から21日にかけて突風が襲来して、湾内の蒙古軍の船はほとんど転覆するか、湾外に吹き流されてしまいました。神風第一号です。

その翌年の1275年、元はまた使節を寄越します。正使は蒙古人の杜世忠34歳、以下、副使は漢人の何文著38歳、計議官（会計係？）は回回人の撒都魯丁（サンドルティン）32歳、書状官はウイグル人の国人果32歳、そして通訳に高麗人の徐賛32歳の5人です。

一行は4月に長戸国室津に到着しましたが、7月まで太宰府に留め置かれた後、7月20日に九州を出発、8月30日に鎌倉に到着します。しかし、北条時宗の鎌倉幕府はこの5人を斬首と決定、9月7日、片瀬の龍の口刑場で執行されます。彼らが持参したはずの国書には何が書かれていたか、その後どうなったか、残念ながら分かりません。この6年後に2度目の襲来、弘安の役となります。この時も幸い神風が吹いたのはご承知の通りです。

5名には五輪塔が建てられ、里人らの供養が続いていたと言われますから、たんなる罪人としてではなく、一応、国使として処遇された上での刑執行と推定されます。

常立寺の元使の墓

さて、ここから話はぐんと現在に近づきます。関東大震災（1925年）の後の道路整備の際、この元使塚を改葬することになり、常立寺の当時の住職がそれを引き浮けて、丁度斬首650周年の祥月命日にあたる大正14年（1925年）9月7日に盛大な慰霊祭が行われました。

私は平成15年の9月7日、当時のバトジャラガル駐日モンゴル大使をこの墓にご案内しました。大使は「これはわれわれの大先輩、初代の大使の墓であり、日本に着任したら真っ先に来なければならない場所である」と言われ、以後、大使館の大事な行事として引継がれています。また平成19年には来日したエンフバヤル大統領も参拝されました。大相撲の地方巡業で藤沢場所が開かれる時には、前日にモンゴル出身力士も参拝に訪れます。

常立寺はJR大船駅からのモノレールの終点駅の真下1分のところですので、皆さんも秋の一日、アジアと日本の歴史の一こまを訪ねられてはいかがでしょうか。

（本稿は7月8日の会員フォーラムにおける協会参与・都竹武年雄（つづくむねお）氏の講演内容を編集部で要約したものです）